

日韓中連帯の方策

国際文化財団
理事長 久保木修己

韓国の国際的な地位が一九八八年のオリンピックを境に破格的に上がってきています。経済的な発展もめざましいものがあります。造船、鉄鋼という日本の得意分野も最先端産業である半導体なども、韓国の激しい追撃に遭い、日本の業界は悲鳴を上げています。

また、中国の経済的発展も世界の脚光を浴びています。二十一世紀は中国の世紀と言う学者も現れました。人口十数億という巨大市場に、世界中の企業が進出の足がかりを探っています。

これまで、日本はブーメラン効果を恐れて、韓国や中国に対して、技術移転を怠ってきました。しかし、もうそういう姑息な態度では、日本の将来は暗澹たるものになりかねません。日本がいくら隠しても、他の国から学んで自分のものにしていくに違いないのです。だとすれば、日本はもっと積極的に日本の技術を韓国や中国に移転して、水平分業を進め韓国や中国と共存共栄の道を考えるべきです。そうなれば、東アジア地域における経済統合、あるいは地域統合も夢ではなくなります。また世界は東アジアを無視することができなくなります。

日本だけが相手ならば、世界はくみやすしと見るでしょう。自己主張の弱い日本は、世界に通用する論理と言語で語ることに不得手です。それに隣国から信頼されていない日本は、東アジアを代表することができません。しかし、韓国や中国との関係で信頼を勝ち取り、運命共同体として、共存共栄の道を歩み始めたら、話は別です。次の時代の日本の外交戦略は、東アジア、その中でも特に韓国と中国との関係を機軸に据えるべきです。

一九八一年十一月、文鮮明先生は、世界の科学者を集めた「科学の統一に関する国際会議 (ICUS)」の中で、国際ハイウェイ構想を提唱されました。この構想は、まず日本と韓国をトンネルで結んで、中国からアジア、ヨーロッパ、アフリカへ、さらにはアメリカ、南米へと続く世界的な国際ハイウェイ網を建設しようというものです。それでまず日本から大陸に向けて、日韓トンネルの掘削工事が開始されています。

日本と韓国が怨念を超えて連帯するには、相互の努力が必要であるとともに、共通の目標が必要です。共に手を携えて、未来を作る方向に一步踏みだそうということです。陳腐な言葉になってしまいましたが、いわゆる「未来志向」ということです。この未来は、過去を忘れることによって、もたらされるものではありません。過去を謙虚に反省し、清算することから来る未来です。

文先生は、韓国人にはいつも「過去を忘れよ」と指導します。しかし、日本人には「過去を謙虚に反省しろ」と指導しています。そして、共に手を携えて未来を作る共同作業として、日韓トンネルを提唱したのです。これは民間の一宗教団体ができることではありません。両方の国家が国を挙げて取り組むべき課題です。かつて、新渡戸稲造は「太平洋の懸け橋とならん」と言って、日本の国際化に貢献しました。今は、「玄界灘の懸け橋」ならぬ「日韓トンネル」が必要です。

もし、日韓の間で、共同の目標を中心として連帯することができるならば、日韓を核にした東アジア地域の経

済統合も、決してタブーでも夢物語でもなくなります。そしてその先には、政治統合すら見え始めるのではないのでしょうか。

『第三の波』という著作で有名なアメリカの未来学者アルビン・トフラー博士は、日米関係に言及して、大胆な提案をしています。政治面での日米間の交流と、その結果としての政治統合を提案しているのです。例えば、それぞれの議会で代表を送る「相互代表制」は一案だと言っています。

かなり現実離れしている提案ですが、経済のグローバル化に対応する政治のグローバル化を進めることは、遠からず必要になるはずで、我々はそれを日米の関係でまず模索するとともに、日韓あるいは日中の中で探ってみてはどうでしょうか。日韓あるいは日中の「相互代表制」など夢みたいな話ですが、何事も夢から始まるのです。夢を見なければ、未来を作ることはできません。「未来志向」とは、問題を先送りすることではなく、過去を清算し、未来の夢に向かって、着実に一歩ずつ現実を改善していくことなのです。